

風姿花伝

観る人の寿命を延ばす働きがある申楽さるがくという芸能の、そもそもの源が何かを調べてみれば、ある者は、仏陀のおられたインドに起ってきたものと言い、またある者は、神代の時代から我が国に伝えられてきたものだと言うけれども、どちらにしても、時が移り変わり、幾多の時代を経てきたものであるだけに、ほんとうのところ、それがどんな風になり、伝えられてきたかという事に関しては、いくら調べてもなお、学びきれないものがある。

最近、誰もがもつともらしく好んで言うのは、推古天皇の時代に、聖徳太子が秦河勝はたのかわかつに命じて、天下安全の祈願のため、また同時に、人々の心を晴らし楽しませるため、六十六番の遊宴あそびを行い、それを申楽と名付けて以来、代々、この遊あそびを成り立たせるなかたちとして四季の風月の情景を用いてきたものをいうことだが、その後、その河勝の子孫が、営々とこの芸を受け継ぎ、そのことによつて、大和の春日神社、近江の日吉神社ひえの神事として申楽を奉納する申楽仲間が、両神社の神事をさかんに執り行うのは、そのためとされている。

だから、古きに学ぶにせよ、新しいものに価値を見いだすにせよ、決して、風流はずれを外れないがしろにする事などあつてはならない。賤しい言葉など使わず、その姿が幽玄あそびであつてはじめて、達人であると言つてよい。

この道みちを歩み、遠くにまで到達しようとする者は、まず第一に、能以外のことをしてはならない。ただ、歌道うたみちは、風月ふうげつを折り込んで延年の喜びをもたらす申楽の飾りともいふべきものであつて、何にもまして、大いに役立てるべきものである。

ともあれ、本書は、私が若いころから今に至るまでに、見聞きし学んだ稽古けいこから覚え得たことなどを束ねたものであり、そのおおよそのことを、書き記したものである。